



住宅街の坂を登りしばらく歩いたところに、港を一望する小綺麗な公園があった。
有名な観光スポットとして訪れる人も多かったが、平日の夕方では地元の住民が犬の散歩にくるか、まばらにアベックが肩を並べている程度であった。

辺りに誰もいないベンチに腰掛け、加夏子は港の景色をぼんやりと眺めていた。
赤から灰色に変わりつつある空が、忘れたいあの日の言葉を思い出させた。

死なねばならないのは…
殉、だ

片目の男、殉の兄の声。

ボクの身体、もう駄目なんだ…

乾いた殉の声。

考えさせて、と言った。
まってる、殉に告げた。

でも何を話せばいい？
何をしてあげればいい？
わたしなんか何ができるの？

考えても考えてもわからなかった。
わからないまま再会し、どうしようもないまま日々が過ぎていった。

何も手につかなかった
消えてしまったかった…

さっき聞いた父親の言葉が胸に染みた。

わたしも、おんなじ
なにも手につかない
消えちゃいたい
殉のいない世界なんて…わたし…

「カナちゃん」

声をかけられ振り返ると、紗季子が立っていた。
振り向いた加夏子を見て、微笑んでいた紗季子の顔が強ばった。

「泣いてるの？」

言われて初めて、両の頬がびしょびしょに濡れている事に気が付いた。
慌てて乱暴に拭いながら、どうしたのとぶっきらぼうに聞き返した。

紗季子はすぐには答えなかった。
ただじっと娘を眺めていた。

「パパと結婚する前、まだお店に勤めていた頃、そんな風に泣く娘を沢山みた。みんな優しい娘だった。そしてみんな、大切なヒトをなくして泣いてた。理由は色々だったけど… とてもきれいで、哀しい涙だったわよ」

少しして、紗季子は優しい声で言った。

「なにがあったの？ もしかすると、あの目の見えない男の子のことなのかしら」

紗季子の問いに加夏子は答えなかった。

「…オンナってね、いつもオトコに泣かされるの。ううん、そうじゃない、オトコの為に泣いてあげるの。そうやって、自分の哀しみとオトコの哀しみを、一緒に土に還してあげるの」

アナタの涙は、誰の哀しみを還してあげるのかしら

紗季子の言葉に、今度こそ加夏子は泣き崩れた。

◇

翌日。

杖にかける体重が減っているのを感じながら、加夏子は病院への道を歩いていた。

心は決まった

もう泣きはしない

何も出来なくてもいい、最後の最後まで殉に付き添い、一緒に歩く

昨日、夕暮れ時の公園でかけられた紗季子の言葉に思い切り泣き、家へ帰ってから全てを打ち明けた。

恒彦も紗季子も驚き複雑な顔をしたが、二人とも何一つ強制したり意見したりはしなかった。

お前の思うようにしなさい

なにがあっても、わたしたちはお前を支えてやる

だから、まけるな

カナちゃん

いってきなさい

自分の心をそのまま、はなしてらっしゃい

あなたの言葉を彼も待ってるはずよ

両親の言葉が心底、嬉しかった。

自分が一人きりでない事をこれ程意識したのは初めてであった。

考えてみれば、いつも誰かに見守られていた。

一人で生きてきたと自惚れる愚かさとは無縁であったが、身近なものを見落とさない聡明さを得ようと努力したりする事も無かった。

良くも悪くも、ありきたりな女子高生だった。

でもそんな自分は終わってしまったのだ。

寒風のなか顔を上げて進む彼女は、『少女』から『女』への階段を確実に登りつつあった。

加夏子自身に自覚は無かったにせよ…

そこに辛い結末が待っているにせよ…

◇

正門をくぐり、緩い傾斜のあるエントランスを登り始めると、病院の玄関前に長身の白衣姿が立っているのが見えた。

近づくまでもなく、加夏子にはその人影が九十九だと判った。

歩みを進めるたび、九十九の姿が鮮明になってくる。

両手を後ろに組み真っ直ぐに立ち尽くす彼の姿はまるで、何かを告げるべく人々の前に現れた預言者のように重々しい雰囲気を放っていた。

話しかける事を躊躇わせる厳しい表情は、普段の飄々とした彼とは別人のようであった。

「…長官…」

「来たね」

「なにかあったんですか？ こんなところで…」

「昨夜、堀川君が倒れた」

「え？」

「今ICUにいる。高熱で意識不明、呼吸困難、肝機能も低下している」

「そんな！」

加夏子は絶句した。

「予断を許さない状況だ。万が一のことも考えられる。覚悟しておきなさい」

加夏子の手から杖が落ちた。

◇

駆けつけたICUの前で、佐野碧が心配そうに座っていた。

「おねえちゃん」

「…」

加夏子は何も言わずにガラス窓へ貼り付いた。

酸素マスクをつけ、チューブとコードを体中に這わせた殉の姿は、奇妙な虫に寄ってたかって血を吸われているように見えた。

額に皺を寄せ苦し気な呼吸を繰り返すたび、マスクの内側が白く曇る。

「じゅん…」

加夏子は言葉もなかった。

自分が躊躇している間に、殉の肉体は確実に病に蝕まれていた。

もっと早く気持ちを決めていれば、こうなる前にもっと沢山、話す事があった筈だ。

悲しみより後悔が加夏子を押し潰した。

「おねえちゃん、泣かないで。お兄ちゃん、ちゃんと判ってるよ、おねえちゃんが来たこと」

「え？」

「いっばいってる、『カナ、ごめん』って。何度もなんども」

「ゴメン？」

「『ぼくが弱いから何も言えなかった。僕のために泣かないで』ってってる」

「碧ちゃん、聞こえるのね」

「ウン。ここでずっとおはなししてた。絶対、おねえちゃんが来ると思ったから」

加夏子は泣きたくなかった。

悲しいからではない。

こんなになってまで自分を気遣ってくれている殉と、ひたすら自分が来るのを待っていた碧の気持ちに泣きたくなかったのだ。

「お兄ちゃんがどこかへいっちゃいそうになったら、ウチが連れ戻す」

まだ幼さの残る顔に決意を滲ませ、碧が加夏子に言った。

「パパもママも弟もみんな死んじゃった、電車のなかでつぶされて。もうあんなのイヤッ！　ウチ、ゼッタイに嫌だから！！」

ひとつしかない手でスカートの端を握り締めながら、碧が叫ぶように言った。

「碧ちゃん、殉にサイコインする気なの？」

「ウチ、恵美子お姉ちゃんの大好きなヒト、連れてこれなかった。恵美子お姉ちゃん、すごく哀しそうだった。加夏子お姉ちゃんまで、あんな風に哀しくさせたくない」

そう言った直後、碧がはっと顔を上げ加夏子を見た。

「どうしたの？」

「今、お兄ちゃんが言った。『まだいかない、大丈夫、そこでまってて』って」

目を見開いた加夏子の眼前で、医師と看護婦が慌ただしく動き始めた。